

研 究 紀 要

図 書 館 部 会

講演

「図書館の内と外から日常を想像する」

ライター・エッセイスト オラシオ（白尾嘉規） …… 1

実践発表 1

「黒石高校の図書館環境を考える」

青森県立黒石高等学校 竹 村 俊 哉 …… 6

実践発表 2

「生徒の居場所としての図書館整備と評価」

青森県立五所川原農林高等学校 田 中 満 …… 8

部 会 の 動 き …… 10

研 究 テ ー マ …… 11

紀要編集委員 櫻 田 みなみ（青森県立三沢商業高等学校）

図 書 館 部 会

研究テーマ

「魅力あふれる図書館を目指して」

講 演

「図書館の内と外から日常を想像する」

講師 ライター・エッセイスト オラシオ（白尾嘉規）

1 はじめに

人前で話す際は緊張する。面白いと思う時にはぜひ笑って反応していただければ幸いだ。今日は高校の先生方にお話をするということで、高校の時の話をしたいと思う。高校生の時に作ったサインの中には「シラオ」という私の名前をデザイン化して入っていた。小学校の頃から物書きになりたいと思うようになり、現在はその思いが叶った形だ。地方移住者でライターになる人は多く、都会でベーシックインカムとなるような収入源を得て地方に移住する人が大多数だ。私の場合は、地方在住でありながらライターとして、特に音楽ライターとして活動を始めることができたという点を嬉しく思っている。

実は、学校図書館についてとなるとお話しすることが難しい。実は高校まで図書館を使ったことはなく、大学に入ってから図書館ユーザーになった。そのため、学校図書館担当の先生方に対して具体的なアドバイスやアイデアを示すなど、ということは自分にはできない。「全国の公共図書館を旅する」と題したスライドを見ていただきながら全国の図書館について紹介していきたい。その中でヒントになるようなことがあれば嬉しく思う。学校図書館は非常に話題になっており、LRG（ライブラリー・リソース・ガイド）の学校図書館特集も非常に話題になっていた。

2 『図書館ウォーカー』

『図書館ウォーカー』は、陸奥新報での連載が書籍化されたものだ。県内在住のデザイナー齋藤一絵さんに装丁を手掛けてもらい、素敵なデザインで現在2巻目までが発行されている。全国で訪ね歩いた図書館数は550とプロフィールに書いていたが現在は650か所に及び、公共交通機関を利用して、全国津々浦々を訪ね歩いている。

『図書館ウォーカー』について、図書館学の准教授を始めとして、いろんな方々から「フィールドワーク」「ナチュラルボーン考現学」「カジュアルな新日本風土記」などと言われることがある。個人的には「孤独のグルメ図書館版」だと思っている。孤独のグルメも実際にその場で話しているわけではなく、心の声で感想を述べている。私も図書館を巡りながら心の中で感想をつぶやいている。

『図書館ウォーカー1』と『図書館ウォーカー2』について2冊の共通点は気軽にさくっと読める、一館につき1100字のテキスト、オールカラーの写真250枚以上、公共交通によるアクセス情報、おすすめスポットについて載せている。ここの図書館へ行けばそういう所も面白くなるよということ。大事にしているのは実際に行ってきたドキュメント感。私は結構旅行へ行くと雨なのだが、実際に行った時に雨だったときはその写真を載せる。一緒に旅している感じを味わってもらおうと思っている。使っているカメラもプロが使うようなものではなく普通のカメラでポケットに入れられるような小さくて軽いもの。内容は、いろんな図書館があって図書館ではいろんな楽しみ方ができるということと、図書館をカテゴライズ（「勝手ゴライズ」）、旅先で図書館を楽しむコツである。

3 県内の図書館を巡ってみて

イントロダクションとして青森県内の図書館を紹介する。まずは中泊町小泊地区にある中泊町本漁火センター図書室は建物の屋上に船（イカ釣り漁船）がある。中泊の人たちには当たり前のことでも旅行者（よその人）から見ると面白い。町歩きをするとかわいいデザインの標識があったり、海がきれいだったり、公共交通バスから見える景色がよろしい。また、中泊町総合文化センターパルナスには町立博物館がある。図書館以外にも楽しめる。駅本

庫がある藤崎町。もとの職場である青森市民図書館。青森駅近くで海際の建物の高層階にあるので窓から海が見える、疲れるとき海を見て癒やされた。油川市民センター内の図書室はなぜかガラス張りのデザイン。名物は巨大がかしで、旬の人がかかしのモデルになる。東部市民センター内図書室はセンターの中がかわいい。名建築でなくても自分がいいなと思うところあればそれでいいといった図書館ウォーカー的姿勢である。西部市民センター内図書室はプールが併設されている。ここも足を伸ばして散策すると向こう側の町の坂の景色が見られる。観光地でなくてもおもしろい景色があるわけで、図書館ウォーカーの旅の醍醐味である。八戸駅併設の八戸図書情報センター。大学に入るまで全く図書館ユーザーではなかったが、入学してから通い始めた最初の図書館である弘前市立弘前図書館。桜つながりで五所川原市立図書館。いろいろ頑張っている。裏に池があり水鏡がある。その周りに桜がある。十和田市民図書館。三沢市立図書館は渋い建物で思わずカッコいいと言ってしまふ。三沢は隠れた温泉の街であり、市内各地で温泉を楽しめる。

県内の図書館である意味とりわけ好きなのが、田子町タプコピアンプラザ内にある町立田子図書館。田園地帯と街中を分けるあたりにこの中にこの建物がある。円形分水塔みたいだ。にんにくの町なのでこういう（にんにくの形をした）柱がある。田子に行くときに楽しみにしていること。三戸駅前から公共交通バスに乗っていくが、この地区の路線バスの座席がずれているのも面白い。全国でこういうデザインはここだけなのでは？だからどうしたの？ということだが、日々こういうバスに乗っているこの地区の人々の日常を想像する。むつ市立図書館は名建築である。横浜町民図書館がある横浜町民センターは隣が老人福祉センターで温泉がある温泉図書館である。大間の図書室には展望塔が入っている。佐井村。西目屋村の図書室。高級スナックのような内装の平川市図書館。平川市の尾上の図書館。螺旋階段からの展望塔がある図書館。建物の別の所から見た岩木山もいい。階上町にあるハートフルプラザ階上内にある2つの図書室。お金持ちの邸宅のバスルームのようなタイルが敷かれている。県内の図書館の最後にすぐ隣の青森県立図書館をあげる。街から遠いのが難点だが、上階に近代文学館がある。どの図書館も各の規模にとらわれない頑張りを感じる。

4 「図書館勝手ゴライズ」という楽しみ方

図書館機能と全く関係のない機能を分類して勝手に楽しんじゃおうという考え方で、私がカテゴリ化したものである。

- ・名建築図書館（映え系、私的認定）
- ・水鏡図書館（だから何なの？というたぐいの）
- ・絶景図書館（そのサブカテゴリーに海が見える、展望塔があるなど）
- ・複合施設の中の図書館（施設系温泉図書館、駅図書館など）

全国の図書館を紹介しながら見ていく。名建築図書館は2つある。映え系。要するに有名な建築家が手がけた誰もが評価する名建築。または名建築ではないかもしれないがSNSに投稿されて高評価をうけるもの。一方、地味な建物だがなんか良かったという自分的に良かったものも名建築に入れていいのではないかと考える。映え系の例として、図書館名建築を数多く手がけている新居千秋さんが設計した岩手県大船渡市のリアスホールをはじめとして、オーテピア高知図書館、長浜図書館、諫早市立たみ図書館、南相馬市中央図書館、滋賀県守山市図書館、富山市立図書館本館、東京都武蔵野プレイス、鳥取県境港市立図書館、和歌山県新宮市立図書館、などをあげる。また利用者を集める図書館の雛形を作ったとしてTSUTAYA図書館は学ぶべきである。全国いろんなところにTSUTAYA図書館はあるが地元の名産品を使ったお土産を売っているコーナーがある。それは地元文化と人を結び付けるものなので図書館はやっていいのだろうし、やっていくべきかなと思っている。他に宇和島市立簡野道明記念吉田町図書館。北海道湧別町の中湧別図書館には無料で見られる漫画博物館とかもある。能登半島にある石川県羽咋市図書館はトイレの標示も宇宙人というUFO推しが随所に感じられる。メルヘンチックな外観の芽室町図書館。北海道白糠町にある白糠公民館図書室は横から見ると教会だが屋根は瓦と和洋折衷な感じが面白い。単に建築面だけを見ただけでもいろんな図書館がある。

私が力を注ぎ探しては行くようにしているのが海が見える図書館である。例えば『2』に載せた佐賀県太良町大橋記念図書館、建物もクラシックでカッコいいが、この2階から有明海が見える。瀬戸内海に浮かんでいる大三島の大三島図書館。北海道雄武町の雄武町図書館雄図ぴあ。北海道根室市を歩くと、町中に「返せ、北方領土」のような看板がある。こういったものは当事者意識でありよその土地の人と違うのだということを学ばせてくれる。

5 旅先で図書館を楽しむコツ

伝えたいのは本だけではないのだということである。旅先で図書館へ行くという発想がそもそもないとよく言わ

れる。それは図書館というのは本を借りる施設なのだという前提があるからだ。旅行先で本を借りられないわけだからそれで図書館で何をしたいかわからないということになる。そもそも本だけを扱う公共施設というのが図書館なのか。20年ぐらい前に在米ジャーナリストの菅谷明子さんが『未来を作る図書館』を出版し「ニューヨーク公共図書館」を取りあげ、図書館のイメージは本以外で人と情報を繋げていて、もう本だけではないのだとおっしゃっている。それから20年経っても、日本では実は図書館の本以外の部分というのはあまり知られていかない。厳しいことを言うようだが、図書館公式のアカウントとか、図書館員の個人アカウントでSNS上で発信する、図書館と本を結びつけるような内容は間違ったイメージだと言ったら強い言葉だが、図書館のことを広めたいと思って発信しているのだったら、もうちょっと内容のバランスを考えた方がいいのかもしれないと思う。じゃあどういうことができるのかということ考えたのが『図書館ウォーカー』なのである。地域の文化や歴史との関わりが強い施設つまり博物館とか美術館のような観光者向けの立地とは違って、図書館はその町の日常を感じやすい場所にある。例えば住宅街の端っこに建っていて観光地とは違う。そういうところを歩いていくとまたひと味違った旅が楽しめるのではないかと、そういう目線で図書館をとらえてみようということである。私は、もしこの町で生まれ育ったらとか、もしこの町に移住したらということを考えてつつ図書館に向かって歩いていく。例えば公共交通はどれぐらい走っているかと、どんなものを食べているかと。飲食店はどれくらいあるかと。歩いて買い物に行けるスーパーがあるとかいろいろな情報を見て、自分がそこにもし住んだらどういう暮らしになるだろうかと。ことを考えながら図書館を旅するわけである。それが図書館の内と外から日常を想像することではないのか。図書館はその日常に近い施設にある。ゆえに図書館旅はそういう考え方をして楽しむものだと思う。

図書館の中では本以外にいろいろなパンフレットを配布している。こういうもので、地元の文化とか歴史とかを学ぶ。地元のグルメを教えてくれるなどレシピ系のパンフレットは結構あり、帰って自分の料理に応用できる。そこで作られる農作物について学ぶこともできる。図書館がオリジナルで作っているリーフレットは人と情報を本だけじゃなくて、自分の情報をつなげるためにある。地元の小学生が書いたパンフレットなど地元目線みたいなことが書かれてある。図書館の隣に併設の文化施設があればそれは地元の文化と人を繋げる施設なので、もし図書館に行った時にこういうものがすぐ近くにあったり、併設していたりしたらぜひ足を運んでほしい。

三戸町を紹介すると絵本作家の馬場のぼるさんは三戸町出身だから（11匹のねこの像が）役場前のバス停にいる。ちょっとおすまじな感じなのだが、三戸町立図書館の前ではただらだらして寝転がって本を読んでいる像である。図書館の方がただらだらしているのがいい。青森市民図書館の例。図書館ではいろんなイベントをするが、青森市内新町のカレーのお店を知ったのはそもそも図書館のイベントである。このオーナーは青森市民図書館の本でカレーについて学び、店を開いた経緯がある方らしい。そのことを知った図書館員はトークイベントを企画した。それで店の存在を私も知り今は常連になってせっせと通う。これは、図書館が企画した本以外の何かがこのお店の情報に繋がった好例である。これを旅という舞台上に置き換えていくとこういうことになる。ある地元在住（出身）のクリエイターやお店のオーナーがいるとする。それを図書館員が察知してトークイベントを企画しポスターとかチラシを配布する。それをたまたま図書館ウォーカーが図書館に行った時に見て、こういう人がいるのか、こういう文化があるのかと知る。例えばそれをネットで検索した時に、その料理を出すお店とか作品を売っているお店に行ってみたりしてまあ出会いがあるわけだ。これも本以外の何かからこの地元の文化につながる道筋代わりなのである。また実例として、図書館の外の自販機に地元で愛されている名産品などが売られていたことがあった。こういう所には観光客は絶対行かない。そういう場所にこういうものがあって発見するのが楽しいわけである。

6 図書館というもの

図書館は街の一部だというふうに言われることもあるが、私はその発想を逆にしている。街も図書館の一部なので、公共交通で図書館に向けて旅をするし、始めるところから図書館を楽しむことは始まっている。図書館の周りのことを全部含めて楽しむのがいいのではないかと。なぜかという、図書館は地域密着型施設だから。地域の文化と密接に関わっている施設だからなのである。ただ、図書館はいつも点として切りとって語られている。それは何かというと、図書館を紹介しているものは大体のその図書館のことしか書かれていなくて、外側の街について書かれることはない。それはちょっと私としては不思議なのである。日本最北秘境駅と言われる抜海駅にたまたま行ったときである。駅に下りたら折り返しの電車が2時間半後。一緒に下りた親子連れの2人がいたが、私は2時間半もあるから歩いて20分か30分ぐらいの海沿いの集落まで景色を楽しんだ。駅に戻ったらその親子連れが駅からずっと動かないで待っていた。これが、点として切り取るということである。その人たちは多分、鉄道愛が深い人たちだろう。しかし何かに愛情を持つとなぜか見方が点状になる。周りのものは関係なくなるところがある。そう、図書館についても、書く人は図書館愛がすごく強いので知らず知らずのうちに図書館愛が同じように強い人に向け

たものを書いている。そうすると図書館に興味がない人には全然届かないものになってしまうという弱点がある。そういう類の本もちろん必要なのだけれども、何かそうじゃないものもあっていいのではないかなと思って『図書館ウォーカー』を書いている。それが図書館を点として切り取るのではなくて、周りの街のことも書いたりすることである。ある有名な図書館について言及される時には、その図書館のことしか書かれていない。私的には徒歩10分圏ぐらいの周りはこんな街なのですということを書いて、街の風景と立っている図書館とのコントラストを楽しむ。周りの街のことを知るとさらに図書館の面白さも分かる。日常の街の中に溶け込んでいる例は色々あるのだが街との関わりを考えると、より図書館が面白くなるのではないかなということである。公共交通の旅を大事にしている理由の一つは地元のコミュニティにちょっとお邪魔したように感じられるからである。例えば週に3日間しか走っていない高知県のある路線バスに乗って地元のおばあちゃんの高知弁の会話を聞きながら行くのが良かった。バスからは絶景が見られるが、公共交通は誰でも乗れるものなので要するに乗りさえすれば誰でも見られる絶景なのである。

7 終わりに

『図書館ウォーカー』で大事にしているのが、「誰にでもできる旅」ということである。高校生にも真似してほしい。車を運転できなくても行けるからだ。この本を読むなど、私は誰でもできることをやっているから旅行番組の取材のような感じで図書館に行かない。旅行番組を見ると、特別に入れてもらいましたというのが多いが、あれは自分がやろうとしたらできない。私は図書館に行ってほしいという目的があるので、「それ行ってみてもできないじゃん」というのは駄目なのである。極力、公共交通で誰でも行けるようにそして普通に歩いていて普通に見るものを面白くなることを収録している。図書館の捉え方としては、はなはだ変化球であったが、こういう楽しみ方もあるぞということで、今日はお話させていただいた。

【質疑応答】

質問 オラシオさんが図書館内部の写真も一切取らないということに関して、それは目的がそれだけに限られてしまっておラシオさんが発信したい図書館のイメージとそぐわないというのが関係するのかなと思われるが、その理由を聞かせてほしい。(青森県立八戸北高等学校 榎本 純子 先生)

回答 今日のお話は公共図書館に限った話なので、高校とは関係ないかもしれないが、8年間図書館で働いて思ったのが写真撮影したい人への対応はとても難しいということである。公共図書館はその利用者さんの個人情報保護についてもものすごく厳格なルールもある。その代表的な一つはその図書館を利用しているということそのものが個人情報に当たるということ。その館内で撮影したいという人に対しては、まず人を写してはいけないとか、その本を写さないでくれとか色々伝えることがあり、対応が難しいというのが現場の人間の本当の気持ちである。それを知っているので、わざわざ現場の人たちに心苦しい思いをさせてまで写さなくてはいけないものなのだろうかというのはある。650ぐらいの図書館を巡ってきて、本当は図書館の中を見たいというニーズがあるのは分かっているが、はっきり言うとその図書館の人にお断りをして煩わせてまで撮らなくちゃいけないものでもないっていうか、どこも大体似たり寄ったりな感じはある。これが理由の一つである。あとは本のイメージに固定されてしまうということ。多分図書館とか書店とか関係なくて、とにかく本がたくさん並んでいるビジュアルが好きという人が一定数いるが、『図書館ウォーカー』を最初にそういうものだと思って読んだ人が図書館の写真がないといってもものすごく怒っているが、私はどちらかというと、そういう人に向けて書いているわけではなくてあんまりそういう空間に興味がない人に図書館への興味を持ってほしいということなのである。(オラシオ氏)

質問 今日本屋さんが潰れているが、学校としても本を買うのが大変になっていて、そういう状況の中での図書館の意義について話してほしい。(青森県立五所川原農林高等学校 田中 満 先生)

回答 まず図書館の意義だが学校図書館というのは、その学校の中での役割があって公共図書館とは違うと思うので(本以外の物ではなくて)本に特化することがあるのかもしれないが、私はその辺全然分からないので、学校図書館についてはわからない。図書館については本以外の部分にフォーカスを当てることは、結構大きなことなのではないかなと思っている。学校図書館でできることかどうかはちょっと置いておいて、やはり本を読んでほしいという方は、どうしてもあらかじめ本が好きの人に何かをと発信したり、何かやったりすることになると思う。しかし実はそれは本を読む人が増えることにはつながらない。なぜかという、既にもう理解し合っている人たち同士で発信したり受け取ったりしているから、本にあまり興味がない、図書館に

興味がない人には届かない。だから例えば本以外のものでどういうことができるかな？ということを考えていくと、まあ、ひょっとしたら何かが生まれるかもしれない。そういうふうに関書館を捉えることは大事ではないかと思っている。やはりどうしても関書館イコール本という結びつきがものすごく強力に日本ではあるので、それでいいのだろうかというのはいつも思っている。それを自分なりに表現したのは『関書館ウォーカー』なのである。(オラシオ氏)

質問 もう一度ここには行きたいとか、皆さんに実際に見てほしいとか、そういうところがあったらぜひ教えていただきたい。(青森県立野辺地高等学校 宮川 友貴枝 先生)

回答 旅先で関書館を見ているが、そもそも関書館は日常で継続的に使って評価されるものなので関書館を評価する目線で行ってないが、平川市の平賀関書館は要するに展示の仕方とか工夫して頑張ってる。個人的に好きなのは芽室町関書館。言語化しにくいけど、デザインも面白いし展示全般の仕方が結構面白い。(オラシオ氏)

「黒石高校の図書館環境を考える」

発表者 青森県立黒石高等学校 竹 村 俊 哉

1 利用しやすい環境づくり

(1) 黒石高校図書室

現在勤務しているのは来年 100 周年を迎える黒石高校だ。図書部の職員 2 名，学校図書館サポーター 1 名が運営にあたっている。図書構成としては，社会科学と文学に力を入れており，看護科があるため別に看護図書室もあり，医学関係の書籍が豊富にあることも特徴だ。利用状況としては，一日の平均入館者数は 20 人，一日平均貸出数は 2 冊。

(2) 「入り口はどこか」

私が気になっているのは，黒石高校の図書室の入り口が分かりにくいことだ。利用者があまり多くないということもあり，よりオープンな雰囲気を出して，ガラス張りの室内が見えやすい入口にして入りやすい図書室にしたところだが，諸般の都合でなかなか要望は通らないのが現状だ。

(3) 展示の工夫

図書室内に足を踏み入れると，「本のお花畑」のような書店ではいわゆる「面陳」と呼ばれる展示を行っているのが目に入ってくる。図書委員のPOP展示，本屋大賞コーナー，季節に応じたコーナー，震災関連，寺山修司・村上春樹，漢字検定対策，おもに岩波と中央公論の新書，なるにはBOOK，郷土作家，心に響く作家，手塚治虫などのコミック本，卒業生による寄贈図書，全集，小論文対策，黒石市立図書館と連携した「百冊文庫」など，多種多様なコーナーと展示をしている。

近年取り入れた取り組みとしては，「本のまくら」もある。この取り組みは本を手にとってもらおうというものだ。埼玉県の高校での実践例を取り入れたもので，本の書き出しの一行を書いた紙でブックカバーのように本をつつんでいる。加えて，学級文庫セットを各クラスに貸し出している。学級文庫に関しては現在流行っている書籍ではなく，近現代の名著を中心にそろえている。

(4) 掲示物や活字に親しむ取り組み

図書館の展示と同様に，掲示物においても本を手にとってもらうための様々な工夫を凝らしている。図書委員による読書推進標語を図書室前に掲示している。その他にも，スライドをご覧になってお気づきの方もいるかと思うが，前任の図書担当が書道教員だったため，筆でしたためた掲示物も特色である。また，新聞学習を実施しており，年に 15 回朝の HR で新聞の切り抜き記事プリントを配りその場で読んでもらうもので，活字に親しむことを意識している。

2 図書室の環境

(1) 環境整備

夏季において室内の湿度が高いことが気になる。特に 7～8 月は 70% 台となるので，換気扇やエアコンを稼働して対応している。また，購入図書は毎月 20 冊程度を購入している。研修では，廃棄も積極的に行うべきと聞いたため，古い書籍の整理や廃棄にも力を入れている。令和元年度に 4254 冊と非常に多くの廃棄を行っているが，これは専属の図書館サポーターが導入された影響で突出している。

(2) 生徒のアンケートより

平均読書時間 0 分が 57% と半数を超えており，1 か月では 0 冊が 52% だ。しかし，学校の授業に出てきた本や先生に薦められた本を読んだという生徒も約 3 分の 1 程度いる。生徒の主な情報源はインターネットやテレビであり，生徒の約 7 割が図書館を利用しないと答えている。「読みたい本がない」「自分で購入した」「本の探し方が分からない」などというアンケート回答もあり，図書担当として改善していきたいと考えている。また，「男性向けファッション誌を置いて欲しい」「利用時間を伸ばしてほしい」などといった回答もあった。そして「図

書館に入りやすい雰囲気にして欲しい」という回答もあったことから、入り口が分かりやすい入りやすい図書室の整備を工夫していくことが必要だと改めて認識した。

(3) 今後に向けて

入りやすい図書室の整備を推進していきたい。そして、「マンガをおいて欲しい」という要望にも着目している。大学にマンガの学部があるように、マンガはすでに一つのジャンルとして確立している。また絵本も幼児向けだけではなく、思想的な内容を含む絵本など多様性が増してきている。本に惹きつけるためのフックとしてマンガや絵本を置くことも検討すべきだと考えている。

私自身も図書館が大好きだ。静かで人があまりいない空間を味わうことは特別な時間だと思う。あの豊かな空間を独り占めしているような感覚は非常に良い。学校図書館の3機能として読書センター・情報センター・学習センターが挙げられるが、最近では自身の教室に居場所を見い出せない生徒が休み時間を費やす場にもなっている。生徒が心を落ち着け過ごすことができる場所として、図書館をより良い形にしていきたいと考えている。

【質疑応答】

質問 生徒が欲しがっている本の購入はどのようにしているか。

回答 リクエストが来た場合は、購入するようにしている。しかし、リクエスト自体が来ないことも多いので、図書委員に諮ったりしながら購入するようにしている。

「生徒の居場所としての図書館整備と評価」

発表者 青森県立五所川原農林高等学校 田 中 満

1 はじめに

(1) 農業科目の指導を専門としてきた。3年前から図書館業務に関わり、図書に関しては門外漢ではあるが発表を仰せつかることとなった。勤務校の五所川原農林高校は食品科学科、森林科学科、環境土木科、生物生産科の4つの科で構成されており、各分野のエキスパートを育成している学校である。2015年に世界の高校で初めてGLOBAL G.A.P認証（農業生産工程管理）を取得したことが評価されアムステルダムで国際賞を受賞している。

(2) 五農高の身近な「歴史書」

図書館に来て、生徒が一番見るもの。それは、一般書籍ではなく、2003年度創刊で毎年在校生に配布されてきた「五農カレンダー」だ。図書館の入り口に置かれている21年分のカレンダーは大人気。学校行事を写真と共に紹介したカレンダーは在校生だけでなく保護者にも人気が高く、「公開版卒業アルバム」のように親しまれている。実は写真を撮っているのは私ども教務部・図書部で、いつの間にか必須の仕事の一つになっている。元々は、学校図書館の準備室にしまわれていたカレンダーのバックナンバーを見つけたことが展示のきっかけ。勤務していた先生方にご協力をいただき、何とか集めて創刊号から全号を展示している。

(3) 準備室に眠る歴史

図書準備室には、五農カレンダーだけでなく、歴史的なものも眠っていた。明治35年から大正元年にかけての津軽郡立農学校時代の財産目録や青森県立五所川原農学校時代の図書目録（大正5年～昭和5年）である。これらを確認していくと、オリザニンを発見した農学者・鈴木梅太郎の著書『肥科学原理』もこの目録に書かれていたことは非常に興味深い（明治44年6月22日目録登録）。ビタミンを世界で初めて発見したものの、国策や様々な要因でノーベル賞の受賞を逃した学者だが、当時のタイムリーな話題や研究に関する本を置いていたのだということがこの目録から知ることができた。また、昭和の年代不明の台帳を調べていると、見覚えのある本の記載があることを発見し、台帳の使用年代を特定することができた。その本とは新渡戸稲造の『三本木開拓誌』（昭和20年5月31日発行）である。蔵書と図書目録を照合することによって明かされる五農図書館業務の歴史も面白いものだ。

2 図書委員の活動や図書館環境、整備推進指標と評価

(1) 図書委員の活動

図書委員は1か月に1回ほど集会を持ち、昼休みに10分程度の集会を行っている。「3年間しかない高校生活で多くの本と出会いたい」、「読みたい本を購入したい」といった意見が図書委員からあり、それを図書だよりに掲載して学校全体で共有している。図書委員による選書を毎月1回程度開催し、生徒が選んだ本を教員も精査して購入を積極的に進めている。システムの不具合により蔵書数が不明確だったこともあり、図書委員と共に蔵書数の確認なども行い現状を把握することができた。また、文部科学省の第6次5カ年計画に対応すべく、新聞の閲覧コーナーも設けている。朝日新聞・毎日新聞・日本農業新聞・東奥日報・陸奥新報・英字新聞Asahi weeklyを置いており、英検2級指導や大学小論文指導、国語科の授業による新聞の切り抜き等に活用されている。

(2) 県立図書館アシスト事業を活用した環境整備

図書館の施設環境整備には課題が多い。夏季は図書室に冷房がないため、かなり暑くなってしまい、また冬季はストーブがあるものの、天然の冷房が効いている状況だ。図書館の用途は、授業、面談、読書、会議、放課後の受験勉強、帰宅するまでの待機場所等、多岐に渡っているため、生徒の居場所としての空調環境について施設整備を求めている。運営上の問題としては、CASAシステムの不具合がある。システムの不具合に困っているので、いっそのこと、貸出簿を自書式の手書きに変更したら利便性が向上した。また、県立図書館のアシスト事業で防災に配慮した配架に工夫が必要であるとの指摘に対応して最上段は使用しない等の改善をした。また、図

書の廃棄の基準についても指摘があり早急に策定して施行している。

(3) 文部科学省の整備推進指標

図書館で生徒とお話することが多く年間 100 時間以上は生徒との対話を通して、自らの研鑽に活かしている。この 3 年間ふれあいの中で生徒の小・中学時代から現在までの読書経験を知るうえで大切な時間を過ごしてきた。選書のセンスを磨くためにも有意義であった。しかし、個々の事情や課題の把握だけに終始しては、学校図書館としての機能を向上させるための論点で取り組むには心許ないと感じていた。今回の発表を契機に、文部科学省の 5 年毎の学校図書館調査の報告書およびそのデータを解析してソリューションの方策を示した学校図書館整備推進評価指標が 2022 年 3 月に公示されていたことを思いだし、決意をもとに再びひとりで試みた。そして、これを参考にしながら、五所川原農林高校の学校図書館の整備推進指標を分析し現状を客観化し数字で改善の進捗を明確化することにした。その結果、図書選定基準の策定、生徒当たり貸出冊数、全校一斉読書活動実施率に課題があることが判明した。特に生徒当たり貸出冊数、全校一斉読書活動実施率は相関関係が高いと感じている。全校一斉読書の取り組みを実施すれば、貸出冊数の増加が見込まれるので、校内で協議しながら来年度以降の実施を検討していきたい。

3 最後に

生徒の読書離れが進んでいるとよく耳にするが、それは本当だろうか。むつ市出身の飯田一史さんの著書『「若者の読書離れ」というウソ』(平凡社刊 2023 年 6 月 15 日発行) という本をここで紹介したい。1990 年度の平均書籍読書冊数は小学生 7.1 冊、中学生 2.1 冊、高校生 1.3 冊だったが、2020 年度の調査によれば、小学生 13.3 冊、中学生 4.7 冊、高校生 1.6 冊となっており、小・中では 2 倍に増えており、統計的には読書離れが進んでいるとは言い難い状況だということを指摘している。第 1 次 5 カ年計画で 50 億円を投じ第 5 次 5 カ年計画まで 250 億円ほど税金を活かした成果であろうか。このデータは、図書館協議会が出したデータとも合致しており、たしかに数字を見ると書籍離れをしているとは言えないと感じた。政府の各種の取り組みや朝読書の普及によって読書の機会は増えている。また、本好きの人は、ほんの 3% であり、そうした本好きの人が薦める本が子どもたちの読みたい本と一致するわけではないことに留意しなければならないといった主張も興味深いものであった。この著書の中では、若者が好んで読む書籍のジャンルなどについても良く分析されている。若者の読書離れが進んでいるという前提で話を進めるのではなく、新たな視点を提示してくれる一冊であった。

部 会 の 動 き

高教研図書館部会関係（加盟校42校）

- 4月19日（金） 第1回東青下北地区部会（於：青森商業高校）
- 4月19日（金） 第1回三八上北地区総会（於：三本木農業恵拓高校）
- 4月23日（火） 第1回役員会（於：青森県立図書館 主担当：八戸中央高校）
- 5月 2日（木） 第1回西北中弘地区部会（於：柏木農業高校）
- 5月 7日（火） 春季総会（於：青森県総合社会教育センター 主担当：八戸中央高校）
- 5月16日（木） 第2回東青下北地区部会（於：青森商業高校）
- 6月11日（火） 第3回東青下北地区部会（於：青森商業高校）
- 6月27日（木） 第4回東青下北地区部会（於：青森商業高校）
- 7月 4日（木） 第32回青森県高等学校図書委員研修大会準備（於：県総合社会教育センター、県立図書館）
- 7月 5日（金） 第32回青森県高等学校図書委員研修大会（於：青森県総合社会教育センター、県立図書館）
- 8月 7日（水） 第1回研究大会実行委員会（於：三本木農業恵拓高校）
- 9月 6日（金） 令和6年度 青森県高等学校教育研究会図書館部会研究大会（於：県総合社会教育センター）
- 9月17日（火） 三八上北地区図書担当職員研修会（於：八戸北高校）
- 10月29日（火） 第70回青森県青少年読書感想文コンクール審査会（於：県立図書館）
- 11月 6日（水） 西北中弘地区図書委員研修大会（於：弘前市民会館）
- 11月 7日（木） 三八上北地区図書委員研修会（於：八戸市立図書館）
- 未 定 第5回東青下北地区部会（於：青森商業高校）
- 12月 第2回役員会
- 2月 第3回西北中弘地区部会
- 3月上 旬 学校図書館部会報（第44・45合併号）発行予定
- 3月下 旬 会計監査（於：大湊高校）

青森県学校図書館協議会（SLA）関係

- 5月14日（火） 青森県学校図書館協議会総会（於：県総合社会教育センター）
- 8月 7日（水） 令和6年度青森県学校図書館研修会（於：県総合社会教育センター）
- 2月25日（火） 青少年読書感想文・感想画青森県コンクール入賞作品集「豊かな心」発行
- 令和7年11月13日（木）～14日（金）
第43回東北地区学校図書館研究大会青森大会（於：青森市内小中学校、青森市男女共同参画プラザ「カダール」）

研 究 テ ー マ

紀 要 集	年 度 (平 成)	研究テーマ	会 場	会 員 数	参 加 数	発 表 数
35	2	今、学校図書館では何ができるか	八戸東高校（八戸市）	195	62	3
36	3	豊かな心を養い、自ら学ぶ意欲を育てる 学校図書館教育をめざして（東北大会と併催）	県総合社会教育センター（青森市）	182	114	4
37	4	平成2年度と同テーマ	つがる富士見荘（鶴田町）	171	50	2
38	5	図書館の果たす役割を高めよう	むつ市公民館・田名部高校 （むつ市）	184	55	2
39	6	平成5年度と同テーマ	弘前高校・弘前プラザホテル （弘前市）	183	54	2
40	7	学校図書館の果たすべき役割は何か	三八教育会館・八戸高校図書館 （八戸市）	178	73	3
41	8	豊かな人間形成のために学校図書館の果たす役割はいかにあるべきか	青森県教育会館（青森市）	180	80	3
42	9	平成8年度と同テーマ	ふるさと交流圏民センター （五所川原市）	164	68	2
43	10	多様化した生徒の実態に即した図書館運営はどうあるべきか	古牧温泉（三沢市）	157	62	2
44	11	平成10年度と同テーマ	南田温泉ホテルアップルランド （平賀町）	166	76	2
45	12	平成10年度と同テーマ	青森厚生年金休暇センター（八戸市）	189	90	3
46	13	自ら学ぶ意欲を育て、豊かな心を養う学校図書館 （東北大会と併催）	県総合社会教育センター・市民文化 ホール（青森市）	193	85	3
47	14	平成10年度と同テーマ	不老ふ死温泉（深浦町）	214	59	2
48	15	新指導要領実施にあたっての図書館の可能性を探る	薬研温泉 ホテルニュー薬研（大畑町）	174	59	2
49	16	これからの学校図書館の可能性を探る	弘前パークホテル（弘前市）	162	58	2
50	17	平成16年度と同テーマ	ウェルサンピア八戸（八戸市）	155	73	2
51	18	学校図書館はいま何をなすべきか	アピオあおもり（青森市）	149	57	2
52	19	平成18年度と同テーマ	オルテンシア ふるさと交流圏民セ ンター（五所川原市）	136	52	2
53	20	平成18年度と同テーマ	下北文化会館（むつ市）	124	51	2
54	21	学校図書館の原点から	弘前文化センター（弘前市）	110	60	2
55	22	これからの学校図書館のあり方	八戸市福祉公民館（八戸市）	133	52	2
56	23	平成22年度と同テーマ	県総合社会教育センター（青森市）	106	54	2
57	24	図書館の「今」と「これから」	オルテンシア ふるさと交流圏民セ ンター（五所川原市）	122	46	2

58	25	豊かな心をはぐくみ、学びを広げる学校図書館 (東北大会と併催)	八戸グランドホテル 八戸市公会堂 (八戸市)	129	80	6
59	26	学びを広げ豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館 (青森市)	131	46	2
60	27	平成 26 年度と同テーマ	県総合社会教育センター (青森市)	122	44	2
61	28	自主の心を育み豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館 (青森市)	121	52	2
62	29	生きる力を育み、豊かな未来を創造する学校図書館	青森県立図書館 (青森市)	128	55	2
63	30	公立図書館との連携による学校図書館の活性化	青森県立図書館 (青森市)	124	53	2
64	令和 元	公共図書館とともにつくる学校図書館	青森県立図書館 (青森市)	126	51	2
65	2	令和元年度と同テーマ 【中止】	青森県立図書館 (青森市)	114	—	—
66	3	魅力ある学校図書館をつくるにはどうすればよいか	オンライン	99	35	2
67	4	いま、本を読むとは	オンライン	100	19	2
68	5	GIGA スクール時代の『学校図書館』の役割	オンライン	92	25	2
69	6	魅力あふれる図書館を目指して	県総合社会教育センター(青森市)	78	44	2